第107回 全国高校野球選手権 青森大会
主催／朝日新聞社・県高野連

憧れの野球 いつか打席に

青森南マネジャー 亀井鳳介さん

骨の難病 8度の手術乗り越え

野球部の仲間と肩を組む亀井鳳介さん（中央）＝いずれも青森市

青森南高校の野球部に今春、2万人に1人と言われる国指定の難病を抱える少年が入部した。亀井鳳介（おうすけ）さん(15)。病気に立ち向かいマネジャーを務めながら、選手として打席に立つ日を夢見て奮闘している。

ノックが始まると、亀井さんはじっと打球の行方を見つめていた。野手から返されたボールを拾い、かごに入れる。マネジャーの役割の一つだ。練習の合間には部室の片付けや米とぎをしている。スコアブックの付け方も覚えた。「忙しいけど、とても楽しい」。いろんなことが初めての経験だ。

亀井さんが抱える病気は「軟骨無形成症」。遺伝子の変異で骨の成長が妨げられる。そのため、手足が短く、身長が低くなる。

小学校卒業後は養護学校に入り、手術続きの3年間を送った。腕と足の骨を人工的に切断し、折れた骨が再生することで伸ばすというもの。痛みがひどく、途中で耐えられなくなる人もいるという手術を8回も行った。身長は18㌢伸びて、148㌢になった。

この3年間はほぼ車いすでの生活。両親は泣きながら「頑張ろう」と亀井さんを励まし続け、最後の8回目の手術は父親が行った。医師の父は亀井さんのために小児整形を学んだという。亀井さんは「お父さんが一番自分の体のことを分かってくれている。（手術をしたのが）お父さんでよかったです」と話す。

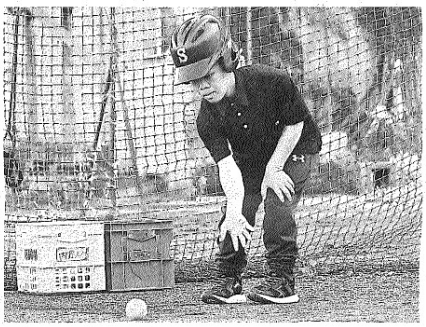
特別扱いなしの部活、忙しく楽しく

そんな亀井さんにとっては、野球は小さいころからテレビの中の世界のものだった。画面の中で選手が打って、投げて、走る姿を「かっこいい」と思い憧れたが、取り組むことはできなかった。

それでも思いはずっと持ち続けていた。リハビリに励んで筋力をつけ歩けるようになると、高校進学を前に両親に打ち明けた。「野球部に入りたい」

病気を抱えながら果たしてできるのか、両親は不安を持ちながらも、反対はしなかった。「中学生の時に好きなことができなかった。高校ではやらせてあげたかった」

両親は事前に青森南高校に相談。学校側には「野球部は厳しいのでは」という声もあったという。しかし入学式の後に亀井さんから野球部入部の意思を聞いた佐藤正臣監督は決断する。「ハンディがあっても野球をやりたいという気持ちがうれしかった。断る理由はなかった」



ノックの際、野手から戻ってきたボールを拾う亀井さん

野球部の仲間もサポートした。ノックの球拾いの時には亀井さんの近くに選手が立ち、いったん選手が返球を受けて、亀井さんが捕りやすいように遅い球で返す。選手たちが練習の中で自発的にそうするようになった。でも、できることはやってもらう。特別扱いしない。工藤悠真主将は「鳳介は青森南の一員。病気なんか関係なく、みんなと一緒のラインに立っている」と話す。

部活が終わって帰宅するのは午後8時を過ぎる。でも亀井さんが「疲れた」「つらい」という言葉をもらすことはなく、口から出てくるのは「楽しい」の声。それが両親にはうれしい。

今はマネジャーだが、いずれは選手として試合に出たいと思う。もちろんハードルは低くないが、佐藤監督は「何とか打席で打たせてやりたい」と話す。ハンディがある亀井さんにも扱いやすいようにと、折れたノックバットを削って長さ50㌢のバットをつくった。

苦しい手術を乗り越えた亀井さんは言う。「楽しくプレーしたい。打席で打ちたい」。その日を夢見て、グラウンドに通い続ける。

（小田邦彦）

朝日新聞 ２０２５年（令和７年）６月２５日（水）掲載。この画像は当該ページに限って朝日新聞社が利用を許諾したものです。 許諾番号「25-1753」